

論文要約

氏名（学生番号）	李博（D166105）	指導教員	佐藤利行教授
論文題目	日本落語と中国単口相声に関する比較研究		
<p>本論は、日本落語と中国単口相声を巡って、文献資料を中心に比較文化的見地から研究を展開していくものである。落語・漫才・講談などを代表とする日本の大衆芸能と相声・快板・評書などを代表とする中国の曲芸とは、長年に渡って芸術面にしても学術面にしても交流が欠けており、まだ共通認識を得ることができない。そこで、日本落語と中国単口相声に関する比較研究を行う前に、中国の曲芸と日本の大衆芸能の概念を明らかにする必要がある。曲芸という言葉が唐の時代に中国から日本へ伝わって以来、ずっとその頃の意味を保っており、ある意味では中国の雑技とは合致しているが、既に現在中国における曲芸とは何の関連もない。中国の曲芸は、演者本来の姿、即ち局外者（第三者）という立場を先導として、話し言葉で語ったり歌ったりする大衆演芸の総称である。日本の芸能で言えば、概念では中国の曲芸とよく似ているのは、民衆の前で演じて見せる様々な寄席芸、即ち大衆芸能であると考えられる。</p> <p>中国の曲芸には、相声という伝統的な笑いの話芸がある。一口に相声と言うが、それを語る芸人の人数によって三つの形式に分けられる。一人だと単口相声、二人なら対口相声、また三人及び三人以上になると群口相声と言われている。芸人の数と見た目で見れば日本の笑いの話芸と比較してみれば、単口相声を披露する場面を見ると、自然と落語を連想させる。したがって、単口相声と落語のように、中国の曲芸と日本の大衆芸能から類同性のある芸を選び出して比較研究を行うのは、芸術交流の面でお互いに長所を見習って短所を補うことに積極的な役割を果たすことができ、学术交流の面で研究分野を開拓することによって共通認識を得ることにも有益であると考えている。</p> <p>第一章はテキスト分析によって日本落語と中国単口相声が構成の面における特徴を明らかにした。</p> <p>冒頭における演者本来の姿について、演者自らの立場に立ち、物語を語る第三者の口ぶりで叙述するという点で、落語と単口相声が一致している。かといって、</p>			

両方の冒頭の構成は、演者本人の叙述だけに限るというわけではなく、演者が担当する登場人物も現れるという場合になると、演者本来の姿が先に出てはじめて、登場人物の役を導入することができるというのは一般的である。冒頭の内容と言うと、単口相声は、必ずしも落語のように、観客への謝意を表す言葉で始まるとは限らなく、観客の注目を集め、演じる場所を静かにするために、よく定場詩を喋りながら枕に入る。

冒頭とは異なり、本題に入ると、演者本来の姿で働く力はだんだん弱くなり、様々な登場人物間の対話が主流となった物語をうまくいかせるように、主に対話背景を紹介することや前文を受けて後文を展開していくことに集中し、つまり、本題の補助的な存在として見られる。この点で、落語と単口相声が一致している。また、登場人物の役について、本題を牽引することができるばかりではなく、さらに最後の落ちを占めるようになり、これも両方共に持っている特徴である。ただ、単口相声には、架空した自分の体験を描く「声を出した泥棒」のように、演者本人を登場人物として本題を作成する例がある。落語の演目ではあまり見ることができないため、これは、単口相声が落語と異なる点であろう。

全体的に見れば、冒頭から本題までの流れにつれて、演者本来の姿による叙述が占める割合はだんだん弱くなっていく傾向があるのに対し、登場人物の役による対話が占める割合は少しずつ強くなっていく傾きがある。また、最後の落ちとなると、必ず登場人物で終わらせる。こうして、構成の面で、落語と単口相声とは同じであるように見える。

第二章は文献考察によって日本落語及び中国単口相声が近世笑話集との関連を探究した。

一部の落語の原型となっている『醒睡笑』及び落語と単口相声に大きな影響を与えた『笑府』の中には、商人や役人や先生などの上層階級の人々に向けた辛辣な皮肉もあれば、間抜けなやつや生意気なやつや意地悪なやつなどを嘲った笑いもある。このように、以上二部の名作が日本落語と中国単口相声の由来を調べる上に、極めて重要な資料であることを認めるべきである。

『醒睡笑』と『笑府』に取材した落語と単口相声の演目は、原話から笑いのつぼを取っただけで、元の構想に拘らなく現実の物事から素材を集めて創作を行う

のが一般的である。こうして、内容を変えて核となる部分を変えないという方法は、目下の創作活動にも適用すると考えられ、落語と単口相声の創作に従事する人にとって身に付けるべきものである。

『笑府』の中にある「鏡を見る」という話が、日本落語「松山鏡」のねたである上に、中国単口相声「間抜けなやつ」のねたでもある。筆者の調べている限りでは、『笑府』の中の話が演目のねたとして同時に落語と単口相声に存在しているのは、「鏡を見る」が唯一の例である。そこから、『笑府』が大変影響力のある笑話集であることを見ることができ一方、演目創作に役立つ近世笑話集を深く研究する必要があることがわかるようになった。

第三章は修辞法を基準に日本落語と中国単口相声の笑わせる方法を分析した。

分析によって、落語にせよ、単口相声にせよ、曲解・反復・誇張・婉曲・曖昧・逸脱・強化・詭弁・掛詞、合わせて九種類の巧みを人を笑わせる主な方法としており、両方とも曲解する方法を多用しているということがわかった。また、主役の人物像の描写について、落語も単口相声も愚か者・ずるい者・いたずら者・変わり者に関係し、中の愚か者がより多くの演目を占めていることが明らかになった。そして、以上九種類の方法を人物像の描写に当て嵌める時、予想不能の突発的な効果を作り出すことが特に重視されており、一般から例外への進みであろうと、主流から極端への走りであろうと、あらゆる変化が笑いの種になりやすいということがはっきりわかるようになった。

第四章は機能等価を基準に落語漢訳を行ってみた。

リズム感の強い文・対句を用いた文・文語によって書かれた文など活発で面白いところを翻訳する際に、それらの様式ならではの味わいを失わないように、それらの様式に従うのを優先的に選択し、内容の面で柔軟に対応すべきである。また、裏表二つの意味を兼ねた掛詞を適切に翻訳することができない時、表の意味はともかく、中国語から裏の意味が伝えられる掛詞を探し出すことに重点を置くべきである。そして、言語変換による情報欠落への対応について、原文の一語一語を忠実に辿って翻訳するより、同等な機能を持っている内容で置き換えるべきである。ほかに、一部の専門用語を翻訳する際に、訳文の簡易化を目的に、より直観的な仕方で表すべきである。

第五章は融合的視点から落語が相声創作の参考になる可能性を検討した。

落語「みどりの窓口」を手本に宅配屋さんに関する相声を創作すれば、創作構想の面で参考にできるものが三つあると考えられる。まず、反復・曖昧・逸脱・誇張・曲解・強化など多様な方法を脚本に導入し、笑わせることを確実に保証する。また、肯定的人物の価値を認めて褒めたたえようとすれば、どんどん褒め言葉を使っていくことより、反対面を描写することを通じて主題を引き立てるほうが説得力がある。つまり、否定的人物の不足・短所などを限りなく暴露しながら肯定的人物を際立たせるというわけである。そして、登場人物の立場を変化させることに基づく場面再現である。笑いの種と突発的な効果を作り出すのに役立つ方策であるため、立場の変化を人物像の描写に当て嵌めることを重視しなければならない。